

<教材・教授法> 初級文法項目と動詞の意志性について : Situational Functional Japaneseの<するverbs>と<なるverbs>

著者	小林 典子
雑誌名	>筑波大学留学生センター日本語教育論集
号	14
ページ	15-28
発行年	1999-02-20
その他のタイトル	<Teaching Methods and Teaching Materials> Plus- and Minus-Control Verbs in Basic Japanese Grammar : 'suru-verbs' and 'naru-verbs' in Situational Functional Japanese
URL	http://hdl.handle.net/2241/11184

初級文法項目と動詞の意志性について

Situational Functional Japanese の〈するverbs〉と〈なるverbs〉

小林 典子

要 旨

初級日本語教科書、Situational Functional Japanese (SFJ) の文法解説には、〈するverbs〉と〈なるverbs〉、〈+をverbs〉〈-をverbs〉（いわゆる他・自動詞）という用語が使用されている。しかし、〈するverbs〉と〈なるverbs〉がどのような定義のもとにあるのか、〈+をverbs〉〈-をverbs〉とどのような関係にあるのか、十分に明確に記述されていない。英語による文法解説の中には「"controllable" かどうか」「行為の主体がその行為に対してresponsibleかどうか」「行為主体を中心に述べようとしているのか」「結果を中心に述べようとしているのか」など、それぞれの文法項目ごとに異なる表現が解説に用いられている。また、「意志動詞」「意志性の表現」という用語も文法を論じるときに一般によく使用される。〈するverbs〉と〈なるverbs〉は動詞の意志性（制御性、control）の観点からの文法的な対立、〈+をverbs〉〈-をverbs〉は他動性の観点からの対立として改めて定義を確認し、SFJのGrammar Notesの解説を見直した。

【キーワード】 する なる 意志性 制御性 自動詞 他動詞

Plus-and Minus-Control Verbs in Basic Japanese Grammar: 'suru-verbs' and 'naru-verbs' in *Situational Functional Japanese*

Kobayashi, Noriko

In the Grammar Notes of Situational Functional Japanese (SFJ), a beginners' Japanese language textbook, the terms 'suru-verbs' / 'naru-verbs' and '+o verbs' / '-o verbs' are used instead of using so-called transitive/intransitive verbs. However, the definition of 'suru/naru-verbs' and the difference to '+/-o verbs' are not clearly explained in the book. In the grammatical explanations, suru/naru-verbs are variously described as follows: "...depending on whether the subject or actor controls the action or not", "the person responsible for the action is explicit or not explicit", "centering on the performer of the action or on the result of the action", etc.

In Japanese grammatical terminology, on the other hand, the terms 'intentional verbs' and 'expressions of intention' are generally used. In this paper, 'suru/naru-verbs' are defined as '+/-intention/control' and '+/-o verbs' are defined as '+/-transitivity'. The grammatical items related to these opposing categories of verbs in SFJ are discussed.

1. はじめに

筑波大学留学生センターで制作した日本語教科書、Situational Functional Japanese、のGrammar Notes（文法解説）を担当した著者の一人として、出版されてから8年を経た現在、あらためてその解説を見直してみる必要を感じた。それは、<する verbs><なる verbs>と、<+を verbs><-を verbs>の理解の仕方に、この教科書を使用している学生の方にも、授業を担当する教師の方にも、（実態を調査したわけではないが）混乱が見られるからである。

<する verbs><なる verbs>の対立を<+を verbs><-を verbs>の対立と平行に考えたり、あるいは同一視するという混乱をおこす場合があるように思われる。そこで教科書の解説を見直したところ、英語による文法解説の中には「する」「なる」の英訳をそれぞれ“to make, to do”と“to become”としていること、「the performer of the actionを中心に述べようとしているのか」「the result of the actionを中心に述べようとしているのか」「controllableかどうか」「responsibleかどうか」「intentionalな表現はこない」など、それぞれの文法項目ごとに異なる表現を解説に用いていることがわかった。これは、各文法項目についての文法解説を書いている時点では教科書全体の文法項目を見渡すだけの余裕がなかったこと、分担した執筆者間でも考え方にずれがあったことなどに起因すると反省させられている。本稿では、教科書の解説に一貫して「controllableかどうか」という観点から<する verbs><なる verbs>を使用していることを確認し直し、する／なるの用語に替えて、それぞれ<+controllable><-controllable>とし、文法解説を見直す。

2. 意志性と他動性

2.1 SFJでなぜ<する verbs><なる verbs>を柱としてたてたか

日本語の特質に関しては「日本語はなる的な表現を好む。英語はする的な表現を好む」などということが文化論などでよく言われてきた。また、言語を扱った論文のタイトルにも例えば、寺村（1976）「「ナル」表現と「スル」表現—日英「態」表現の比較」や池上（1981）「するとなるの言語学」などがある。

そこで、教科書の文法解説の中でも「する・なる」という観点からの説明は日本語の特質を語るのに便利だろう、と考えた。当初はほんやりとそれが他動詞、自動詞に平行して対応する用語、という捉え方もあった。前述の寺村、池上においても自他の対立と「する・なる」の対立の比較はないし、平行的に捉えられているように思われる。教科書の文法解説にあまり文法用語を使用するのは避けようという方針もあり、「他・自動詞」は使用しないで、一般的な用語の「する・なる」を採用した。

現在この判断は間違っていたと私個人は反省中である。なぜなら、一般用語であるだけに、教師それぞれが思い込んでいる「する・なる」は異なっている可能性があるように危惧するからである。意志性／制御性の問題と考える人もいれば、他動性の問題と考える人もいるし、場合によっては「する動詞」はサ変動詞（食事する、増加する等）と考える人もいる。「気がする」「味がする」な

どのように意志性のない「する」もある。「寒くなる」の「なる」と「私は先生になる」の「なる」は性質が異なる。「先生になろう」と意志形が作れるが「寒くなろう」とはならない。「なる」には意志動詞の性質も無意志動詞の性質もあるということに注意しなくてはならない。

学習者にとって<するverbs><なるverbs>の方が<+controllable><-controllable>よりわかりやすいかという点と疑わしい。「する・なる」のようなあいまいな日常用語はSFJの解説で使用しないほうがよかったのではないかと考える。

2. 2 <する verbs><なる verbs>と<+を verbs><-を verbs>

SFJでの「する・なる」の対立は意志性が存在するかどうか、つまり、行為者が自己の意志で行為を制御できるかどうかであって（controllableかどうか）、自他動詞の対立（対象に働きかけるかどうか）と同じではない。SFJで最初に「する・なる」が問題になるのは第3課レストランの場面での「何にしますか」「別々にしてください」および「1500円になります」のような表現で自他の問題ではない。

一方、自動詞、他動詞の用語なくしては、対のある自他動詞の説明など、不便である。結局「を」の有無（通過、出所の「を」を除外）によって自他を表わすこととした。形態的に「を」があるかどうかで他動性の対立を、一方、意味的に行為者の意志でその行為をコントロールできるかどうかで制御性の対立を示して、動詞の記述に必要な柱としたわけである。まとめると図1のようになり、図中の下線の用語を教科書に使用した。

<+をverbs>	「を」をとる他動詞
<-をverbs>	「を」をとらない自動詞
<+controllable>	<u>するverbs</u> ： 意志で行う動詞
<-controllable>	<u>なるverbs</u> ： 変化、経過、状態、結果など意志性のない動詞

図1. SFJでの自他動詞および「する・なる」の扱い方

それぞれの関係を縦横の座標軸にとってどのような動詞語彙があてはまるのか、考えたものが図2である。この図の中にいくつかの動詞を入れていく作業をすると、<+controllable>と<+をverbs>、<-controllable>と<-をverbs>の重なりが多いことがよくわかる。<-をverbs>の「開く・閉まる・消える」などは誰かが、「開ける・閉める・消す」という行為をした場合であっても、それを不問にする表現である。そして、対象である窓やドアや電気が主体となって述べられる動詞である。従って、このような対象を主体とする自動詞は<-controllable>である。しかし、

注意して見落とさないようにしなければならないのは、そうではない組み合わせがあること、また補語の意味によって、制御性の有無が異なってくることである。もし「する・なる」と自他を平行に考えると「行く・来る・走る」のような自動詞で制御性のある動詞や、「(お金を)落とす・なくす」のような他動詞で制御性のない動詞の行き場がなくなるのである。

図2の中では動詞の基本形だけを考えているが、制御性は、ボイス、ムード、アスペクト、テンス、行為主体の人称によっても変化するものである。例えば、<+controllable>のものを受身形、や可能形にすると<-controllable>となるし、<-controllable>のものを使役形にすると<+controllable>になると考えられる。

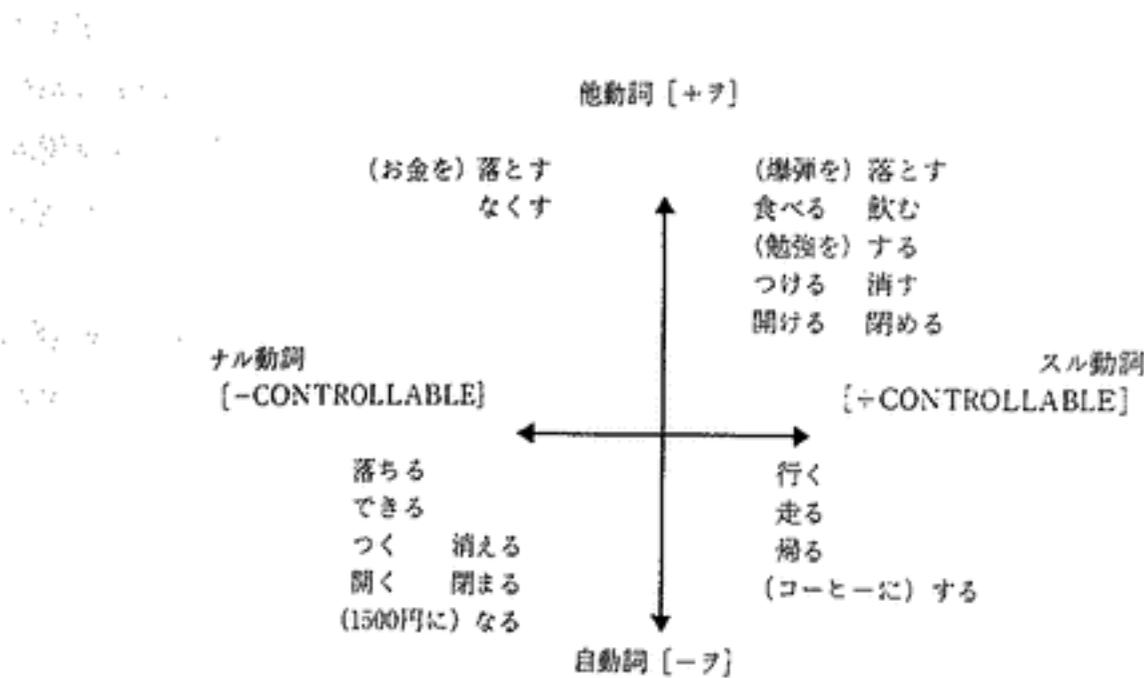


図2. 意志性と他動性による動詞の分類 (小林1996 より引用)

3. 意志性または他動性が問題になるSFJの文法項目

SFJにおいて意志性や他動性が問題になる文法項目を課を追って見ていこう。ただし、その課を学習させているときに、実際に教室でそれを問題にするとは限らない。課の進度によって、既習項目がどの程度あるかによって学習者に指導するかどうか異なるのは当然だ。例えば、第4課(L4)の「いる」「ある」をやっているときには問題にならなくてもL5の「てください」を学習する場合には「いてください」が可能なのに対して「あってください」が非文となることなど教師の側は意識しておくことは必要であろう。

L3

- ・ <名詞>にする <名詞>になる
- 何にしますか <+controllable>
- 全部で1500円になります <-controllable>

・～ませんか ～ましょう

話者の“proposed intention, invitation, suggesting action”というような説明がある。特に制御性に関しては記述がないが、当然<+controllable>である。

L 4

・あります います

「いる」は状態性の動詞であるが、意志によって制御できる。意志形の「いよう」や「いてください」ができる。「ある」はできない。

L 5

・～てください

「<+controllable>てください」で相手への依頼、命令となる。

「幸せになってください」のようなく<-controllable>の場合は願望の意味となり、機能が異なる。

L 7

・～たい

「<+controllable>たい」は主体が一人称「私」で、主体を中心に述べる表現のため意志性の動詞につくと考えるのが基本的である。しかし、<-controllable>である受身は「ほめられたい」「選ばれたい」のように言える。やはり、<-controllable>である可能は「?話せたい」「?およげたい」「?友達に会えたい」のように、「たい」とは共起しない。まだL 7なので、受身も可能も未習であり、ドリルは、<+controllable>の動詞で練習するのが一般的だ。

・開く、閉まる、始まる、終わる、の4つの<-をverbs>が「何時にデパートが開きますか」のような例で出てくる。この課の目標学習項目としては「何時に」という時間表現の方にあつたので、対の自他動詞についての文法解説は特につけていない。しかし、ドリルの中で使用された前述の4つの語、特にL 5で「開ける」「閉める」を学習した後であるために「開く」「閉まる」に混乱するのが常である。文法解説もなしに、この課で初めて対のある自他動詞を導入することになってしまっている。教科書を作成した際の手順<文法項目選定→文法解説→ドリル作成>で、最後のドリル作成の段階での語彙の吟味が十分でなかったための混乱と言える。ドリルの語彙にからむ重大な文法を見落としていた責任を感じる課である。ドリル作成の後に、もう一度文法解説へと立ち戻って解説の追加をするべきであった。しかし、次の8課でも、後の11課でも自他動詞を練習するわけで、その前ぶれとして紹介するのも悪くないだろう。ここでは何を主体として文を述べるのか、という視点を意識させる必要がある。行為をする人に視点を置いてその人を主体として述べるのか、あるいはその行為の行為者は視野になく対象の方に視点を置いて対象を主体として述べるのか、によって自他を選ぶことを学習者に学ばせる。文法解説の手落ちを教師が補わなければならない課である。

L 8

・<+controllable> ないてください

意志動詞を使うのが一般的だが、ドリルには「遅れないてください」「忘れないてください」な

ども入れてある。よく使う表現だからである。しかし「遅れる、忘れる」は意志性／制御性という点で、わかりにくい中間的な動詞である。

・～ている（結果の状態）はアスペクトの問題であって、自他や制御性は+-いずれも使われる。つまり、「<+/-controllable>～ている」（例 結婚している（+）、死んでいる（-））でも「<+/-をverbs>～ている」（例 暑いので窓を開けている（+）、窓が開いている（-））でも正しい文だ。しかし、初級で学ぶ「結果の状態」の「ている」のドリルとして、この課では、「<-をverbs>～ている」の練習が中心になっている。この練習の片寄りが、もしかしたら学習者にあやまった情報を与えているかもしれない。ときどき、状態の表現は「自動詞+～ている」であって、「他動詞～ている」は進行形と決めつけている学習者がいる。しかし、いわゆる状態の「ている」の導入の課としては、これ以上深入りしない方がいいのかもしれない。

L 9

・あたたかくする・あたたかくなる

この課の文法ノートでは「する・なる」の解説がある。そのまま以下に引用する。

Recallするto make, to do, andなるto become. An action or event can be presented in two ways:

(1) centering on the performer of the action

(=the person responsible for the action is explicit.)

(2) centering on the result of the action

(=the person responsible for the action is not explicit.)

するverbs are used for (1) whileなるverbs are used for (2) (下線は筆者)

この説明で言っていることは間違いではないが、これでは「する／なるverbs」が態（voice）を示していることになってしまうのではないだろうか。performerに視点をおいて文を述べたてるか、その結果変化した対象に視点をおいてその状態を述べるかというのは態の問題と捉えられる。制御性の点からは、確かに（1）は<+controllable>、（2）は<-controllable>である。また、ドリルで扱っているような「静かににしてください／静かになりました」の対立では、「する／なる」という語を使い、この課はこの語としての「する／なる」を学習する課である。つまり、ここは単語としての「する／なる」と「する／なるverbs」の文法解説用語と制御性／態の対立とが入り交じっている課と考えられる。しかも、「私は気分が悪くなった／私はげりをした／私は吐き気がする」などの表現がこの課の会話ドリル（文法とは切り離された練習ではあるが）で取り上げられており、ますます「する／なる」の意味で学生は混乱するにちがいない。

L 11

・～たら

SFJではタラ条件文を主文が過去か非過去かで大きく二つに分けている。一つは主文が未来のもの、もう一つは過去のいわゆる発見と言われるタイプのものである。主文が未来のものには「|S2|

can express intention, request or obligation etc.”として意志性を問題にしている。が、発見の方の主文 [S2] が<-controllable>になることは普及していない。例文では「わかりました」「手紙が来ていました」のような明らかなく<-controllable>が示されているが、また「会いました」のような制御性のまぎらわしい語も使われている。この場合、「たまたま会った」という文脈であり、行為者の意志による制御はきかないわけで、<-controllable>である。「?木村さんはデパートで買い物をしていたら、バーゲン売り場に行きました。」のような意志による<+controllable>の動詞はこないことを留意しておく必要がある。<-controllable>が来るということを意識させるためには、「会う」のような制御性についてあいまいな動詞は解説の中で使うべきではなかっただろう。練習ドリルの方には主文が過去になる発見の用法は扱われていない。

・自他動詞 <+/-をverbs>

自他の対のある動詞を取り上げている。文法解説では、「する・なる」はcontrollableかどうかだと説明をしてあるが、‘manyするverbs can take an object marked withを’と説明して「するverbs」は<+をverbs>、「なるverbs」は<-をverbs>と関係づけて説明している。しかし、これは厳密に言うと、正しくないと考える。先にも述べた通り、他動性と制御性は異なる。

1.12

・～と

“the speaker’s intention, wish, request or suggestion is not normally be used in [S2]”と述べて話者の意志性が入らないと述べている。そして、ドリルの中で使用されている動詞は「ある、見える、聞こえる、なる、閉まる、始まる、(たくさん)入る、つく」のような無意志動詞<-controllable>かつ<-を>である。この課の解説にも、練習問題にも<+controllable>の動詞が習慣を述べていれば<-controllable>として扱えるということは述べられていない。例えば「夏休みになるといつも沖縄の海に行く」のような文はとりあげていない。「行く」は<+controllable>であり、習慣ではなく未来の1回限りのことだと、「*今度の夏休みになると海に行く」となり不自然な文である。

ところで、「～と」の文の中での「は/が」の使い方が文法解説で取り上げられているが(p.91-92, Notes Vol2), この解説で用いられている「～と」の例文は、初級のこの課で取り上げていない用法の文である。「.....ぬぐと、.....かけます。」のように「かけます」<+controllable>が非過去の形で使われている。これは習慣を述べていると解釈すれば成り立つが、未来の1回限りのことであればおかしい文である。「.....ぬぐと、.....かけました。」のように過去形であれば、継起的な用法として物語文の中で使われる表現であるが、この継起的な用法もこの課では扱っていない。ドリルではこの「は/が」の練習問題は接続表現「～てから」を使っておこなっている(p.78 Drills Vol2)。従って、この部分の練習にはドリルの問題を利用して説明した方が学習者には親切であろう。教師はこの部分の解説を扱う際、注意する必要がある。

・見える、聞こえる

「見る／聞く」と対比して解説している。“the focus on the result of an action of development”と書かれ、態の問題としているが、<-controllable>でもある。このことは意志性の共起制約の中では重要で、例えば「角を曲がると見える」とは言えるが「*角を曲がると見る」はおかしい、ということの説明できる。

L 1 3

・ヤリ・モライ

特に言及はしていないが、話者主体で<+controllable>なのは「あげる、もらう」でそれぞれ「あげよう、もらおう、あげてください、もらってください」が言える。しかし、「くれる」の主体は他者であり、他者主体のため話者の立場からは<-controllable>である。その証拠に「くれよう」(意志形)とは普通は言えない。これも前述の「〜と」条件文で考えてみると、「申込書は事務室へ行くと、くれる。」は言えるが「*申込書は事務室へ行くと、もらう。」が言えないことを説明できる。

L 1 4

・可能動詞

この課 (Notes Vol 2 p. 162) に ‘potential verbs and controllability’ という見出しで、可能動詞はcontrolできる動詞から作りcontrolできない動詞からは作れないこと、また、可能動詞自体は<-controllable>となることが、記述されている。「開く」の可能形が「*開ける」というように学習者が勘違いしている場合もある。「*消えられる、*閉まれる」などを作らせないように注意が必要である。

可能動詞が<-controllable>ということは可能動詞を学習しているときには知らなくてもいいことではあるが、動詞の制御性に共起制約のある文法項目を学習させるときには、重要なポイントとなる。例えば「ば」条件文の場合、「*煮れば食べます」は非文だが、可能形にして「煮れば食べられます」と言えばいい。

・食べに行く

目的を示すわけだから、「に行く」の前には普通は意志性の動詞がくるが(「しかられに行く」の用法もあるが)、文法解説では特に言及はしていない。

L 1 5

・てみる

普通には「てみる」は意志性の動詞に付く。「ほめられてみたい」などのような受身につく場合もある。しかし、「*話せてみたい」のような可能形にはつかないことから原則は意志性の動詞に付くと言える。

・ておく

これも原則的に意志性の動詞に付く。「そのままにしておく」「開けておく」とは言えるが、「*

そのままになっておく「*開いておく」は言えない。

・てある

練習ドリルは他動詞「並べる、かける、置く、つける、開ける、閉める」を使って部屋の様子を言わせるものであり、文法解説の方でも<+をverbs>との関係を述べている。「ている」との比較では「ドアが開いている」「ドアが開けてある」を対立させ、その状態を成立させた陰に行為主体を意識しているか、無視しているかというような説明をしている。当初試作中のテキストでは「ドアを開けている」という他動詞構文の状態を示す「ている」も入れていたのであるが、学習者の混乱を避け、よりすっきりさせるという目的で、ここでは「自動詞ている」「他動詞である」のように示してある。また、「*あっ、お金が落としてある。」が言えない理由として、「てある」の前は<+controllable>が接続されるが、この場合は<-controllable>であるからおかしいと付け加えている。従って、「てある」の解説にあたっては自他对立を中心に述べて、それに制御性のことを付け足したと言える。

・ていく、てくる

ここでの「ていく、てくる」は「行く」「来る」の動作を含む意味であるので、これらの動詞の前には意志動詞<+controllable>が来る。ここでは扱っていないが、<-controllable>な語が接続すると、「行く」「来る」の動作ではなく変化の意味になる。

例 「増えてきた」「小さくなっていった」「分かってきた」

・命令形

相手に命令するのであるから、行為の主体は「あなた」である。その行為主体の意志によって制御できる動詞しか命令形にはならない。ドリルの中では「忘れるな、間違えるな、心配するな」のような表現も出てくる。これらの語は制御性は弱い語と言える。また、ここでは扱っていないが、「雨よ、やめ!」「ボールよ、入れ!」となると、<-controllable>の命令形になり、この場合は命令の意味というより願望表現に変わる。初級で命令の機能として教えるのであれば、制御性の強い動詞でドリルするほうが、分かりやすいと考えられる。

L 1 6

・意志形

意志形「~よう」が作れるのは意志性の動詞からだけである。

・~と思う、思っている

話者「私」の意志を相手に伝える場合、「と思う」の前には意志形の「~よう」が来る。意志性の動詞の「る」形に「と思う」をつけると他の人の行為の予定を推量する表現になる。(Notes, Vol. 2 p. 211-212)

L 1 7

・~てほしい

この課では特に意志性の問題は普及していない。しかし、ドリルの練習問題はすべて意志性の動

詞になっている。この場合、「～てください」と同じく、相手への要求という機能のソフトな言い方となる。ここでは「私」と「相手」の対話しか扱っていないので、言及はないが、「<-controllable>てほしい」となると、相手への要求表現ではなくなり、話者の願望表現となる。「雨がやんでほしい」「気が付いてほしい」「病気が直ってほしい」

・そうだ (様態)

形容詞に「そう」が付く形の方が多く練習するようになっている。どのような動詞を使うのかについては、特に説明がない。しかし、ドリルや解説の説明にあるのはすべて<-controllable>である。動詞は「降る、倒れる、落ちる、(台風が)来る、」が例文やドリルには使われている。「する」も接続の形を示すためにだけ示してあるが、このような意志性の動詞に「そうだ」をつける例はここでは練習ドリルでも解説でも取り上げていない。「する」のような意志性の動詞は他者が主語の場合に様態を示すことになる。これは話者「私」から見た様子を示す表現であって、もし自分の意志で制御できる行為に「そうだ」をつけて「私はしそうだ」となるとこの課で扱う「様態」の意味ではなく、自分のことなのに、自分の意志とは関係ない未来の予感というような感じになる。ところが、可能形にすれば、<-controllable>のために、「私はできそうだ」「私は書けそうだ」となり、発話時点での話者の様態となる。

・受身

「親に死なれた」「雨に降られた」のような自動詞の受身は初級の文法では不要と考えて、受身は<+をverbs>の他動詞から作るものだけをこの課では練習させている。文法解説の方にだけは「雨に降られた」「友達に來られた」のような例文を示してはある。従って、活用練習は他動詞を使っている。

L 18

・お～する (謙讓)

「私」「他者 (higher person)」の関係の中での「私」の行為に対して使う表現なので、当然、意志性の動詞を使う（「お待ちする」「お持ちする」等）。

L 19

・つもりだ

文法解説では "...expressed the speaker's intention" や "it is attached to controllable verbs" とあり、話者の意志性を問題にしている。しかし、「太郎は買うつもりだ」のように3人称も「つもりだ」をとれるので、上記の解説は "speaker's intention" ではなく "performer's intention" と言うほうが厳密には正しい。"speaker's" と言えるのは「私が」行為主体の時だけである。

・ながら

「コーヒーを飲みながら、手紙を書いた」のような付帯状況の「ながら」を扱っているが、これは「ながら」の前に<+controllable>の動詞の連用形が来る。もし「<-controllable>ながら」

となると、逆接の意味が出てくる。例：「わかっているながら間違えた。」

1.20

・ば（条件）

SFJの文法解説では十分に他の条件表現との違いを説明していないし、解説には誤解を与えるものもある。“ば is not normally used for expressing the speaker’s intention, request, wishes, or suggestions.”とある。「?山下さんが来れば、知らせてください」「?山下さんが行けば、あなたも行ったほうがいい。」というような文では確かに話者の意志表現が入ると落ち着かない。しかし、「時間があれば、私も行きたい」「安ければ買ってきてください」はよく使う表現である。初級学習者には条件文の中では話者の意志を示したければ「たら」を使え、と指導した方が間違え心配は少ない、という教育的な判断で、「ば」の場合主文で意志的な表現は、とりあえず避けさせようと考えて上記のような説明をしたのであった。しかし、「状態性<-controllable>の述語が従属文にきた場合は主文に意志表現ができる」程度の解説は加えた方がよかったと考える。ドリルの方では、「忙しければ、行きません」「わからなければ、だれかに聞きます」というように主文に話者の意志表示のある練習問題が入っている。明らかに解説と矛盾し学習者を混乱させるにちがいない。担当の教師による補足の解説が必要なところである。

1.21

・～て（理由）

「主文のaction or stateはuncontrollable」というように解説してある。具体的には感情表現「驚いた、困った」や可能動詞「行けない」、あいさつの「すみません」が主文に来る。主文に意志性の動詞が来ると「?友達と会って、明日の授業は休みます」となりおかしい文ができてしまう。このような場合は「から/ので」を使って、「友達と会う から/ので、明日の授業は休みます」となる。

・ようにする、ようになる

ここで使われている「する」「なる」については制御性の観点から、説明してある。

以下に引用しておく。

する and the so-called する verbs describe actions that can be carried out of one’s own will, so even if no actor is mentioned, the implication is that someone is responsible for the action. On the other hand, なる and なる verbs imply that any actor is being ignored/doesn’t exist (i. e. things happen naturally) ; they focus on (a change of) state.

・ように（目的）

「～ように（目的）」の「～」の部分は、主文の行為主体の立場から見て、<-controllable>である。従って、「～」の部分には可能表現や、主文とは異なる他者の行為が示される。他者の行為を思い通りに制御することは無理であるから<-controllable>である。この課の解説では、特にそこまで説明はしていないが、「ために（目的）」が学習項目である23課でこれらを比較し説明し

ている。

L 2 2

・使役

「を causative for <-を verbs>」「に causative for <+を verbs>」のような見出しがあるように、ここでは自他の対立を解説に使っている。制御性の面では+/-いずれも使役表現と共起する。「びっくりさせる、喜ばせる、困らせる、」のような感情 (<-controllable> と考えられる) にかかわる動詞が練習ドリルでは使われている。

L 2 3

・ことにする、ことになる

制御性の観点から両者の違いが説明されており、「ことにする」「ことになる」はそれぞれ、'to decide to do'、'to be decided, to come about' のように英訳で示してある。

・ため (目的)

p. 195に 'The difference between ように and ために' として両者の比較が制御性の観点から説明してある。先に「ように」のところで述べたような内容である。

4. 文の構造レベルと制御性

前節ではSFJの文法項目のうち、動詞の意志性/制御性および自/他動詞に注意しなければならないものを抜き出してみた。24課構成の各課の文法項目のうち、19課分36項目を取り上げたことになる。36項目のうち制御性だけが問題になる項目は29、自他の対立も問題になる項目は7つ、あった。このことから、いかに日本語の基本的な初級文法項目に制御性が重要であるかが分かるだろう。「する verbs・なる verbs」を他動詞・自動詞に置き換えられないことも確認できたと考える。

文法解説で述語の意志性を云々することは一般的によく言われているのであるが、それが語のレベルで意志動詞か無意志動詞かを問題にするのか、コト (命題) 内でその主文の行為主体から見ての意志性、制御性を問題にするのか、あるいは、ムード (命題に対する発話時点での話者の態度) 部分に話者の意志的な表現が可能かどうかを問題にするのか、明確に述べられていないことが多い。SFJにおいても、speaker's intention としたところを動詞の performer's intention と訂正すべきと指摘したところが前述した中であつた。そこで、前節で見た文法項目を各レベル、すなわち語レベル、コトのレベル、ムードのレベルのどの部分で問題になるのか、SFJの文法項目に関して外観したものを図3に整理してみる。

<p><u>語レベル</u> (その動詞の行為者の意志でその動詞を制御できるかどうかの関係する) 可能形、受身形、意志形、命令形のような活用形が作れるかどうか。</p>
<p><u>コトのレベル</u> (主文の行為主体の意志で主文の述語および従属文の述語を制御できる かどうかの関係する) ている である てみる ておく ていく てくる たら と ば つもりだ ながら て ように ために くれる 使役構文 受身構文 等</p>
<p><u>ムードのレベル</u> (話者の命題に対する発話時点での意志表現ができるかどうかの関係 する) ~ませんか ~ましょう ~てください ~たい と思う てほしい そうだ</p>

図3. 意志性はどのレベルで問題になるか

上記のリストについて少し述べておく。例えば「落とす」という動詞は語のレベルで考えると、他動詞であり、意志動詞でも無意志動詞でもある。これが「お金を落とした」というコトのレベルでは無意志となり、制御性は無い。しかし、「爆弾を落とした」となれば意志で制御できることになる。「? お金が落としてある」は普通は無意志の動詞であるために、「である」とは結びつかずおかしい文となる。ところで、「である」「ている」などがつくると状態性となり、コトの全体は無意志<-controllable>となる。可能形の場合も同様で、共起制限で、<-controllable>を要求するところに可能形を使うとおさまりがよくなることは、前述したとおりである。条件文の「と」「ば」や、「ように」「ために」の使いわけにも主文の行為主体の意志によって制御できるかどうか問題となる。これらはすべてコトのレベルの問題である。一方、「<意志形>と思う」のように、相手への意志表明についてはムードのレベルの問題である。

5. おわりに

「する verbs」「なる verbs」「+を verbs」「-を verbs」という SFJ の文法解説で使用されている用語を検討するために、関係する文法項目を見直してみた。その結果、説明不足やドリルでの単語の選び方から学習者を混乱させることが危惧される箇所も指摘できたと考える。本稿では意志性、制御性の観点から日本語の文法を総論的に概観する作業を行ったが、各文法項目の各論的な考察は十分に行っていない。前節で述べた文構造のレベルとの、問題はさらに細かく分けて研究していく必要がある。

注

- (1) SFJでは他動詞、自動詞を形式の上で明確にするためにこのように呼んでいる。ただし、いわゆる通過、出所の「を」を除外している。

参考文献

1. 筑波ランゲージグループ (1991) Situational Functional Japanese 凡人社
2. 寺村秀夫 (1976) 「ナル」表現と「スル」表現—日英「態」表現の比較」『日本語と日本語教育—文法・表現編—』国立国語研究所
3. 池上嘉彦 (1981) 『するとなるの言語学』大修館書店
4. 小林典子 (1996) 「相対自動詞による結果・状態の表現—日本語学習者の習得状況—」『文芸言語研究言語篇29』筑波大学文芸・言語学系